

# 西真寺通信

令和五年冬号 発行 西真寺

## ●関係性についての再考

が深まる聞法会となりました。

今年度の行事として、4年間  
総代と寺族だけで勤めて参りま  
した報恩講は、通常に戻す形で  
厳修いたします。現状、他の法  
中寺院の中で中止している寺院  
もあり、コロナ禍による影響は  
未だに残っている状態でのお勤  
めになります。

孤立死や孤独死、お骨さえ引き取  
ろうとしない遺族などは、「原関係」  
の喪失を示しています。相手の心を  
想像する能力の低下から、「関係性の  
喪失の病」(河合隼雄)に至ります。

しかしながら、村上門徒会同  
朋の会主催の西真寺での聞法会  
は昨年から通常通り開催してお  
り、前回8月の聞法会では、西  
真寺総代の方々にも御聴聞して  
頂きました。

人間関係の構築は一層難しくな  
り、関係性から見捨てられた人間は  
常に不安を抱える状態です。し  
かし、関係性に守られる身は安心が  
維持され、お互いに支え合い、お  
か

光齋寺様のご門徒と西真寺の  
ご門徒同士の中で、同級生が居  
たこともあり、仏縁による懇親  
いくのです。

このお金で買えない関係性の  
輪を福祉では、「ソーシャルキャ  
ピタル」と称し、ネットワーク  
の構築が提言されています。

「ソーシャルキャピタル」は、  
既に欧米で地域活性化の資源と  
なっています。この持続可能な  
コミュニティの構築が、経済的  
と社会的な発展かつ人間の成長  
の為の財産であることが共通認  
識されています。

自己に有益でなければ関心も  
興味もないという自動思考を持  
つ現代人にとっては、人と関わ  
ることより、自分の利益の為に  
行動、生活する傾向があること  
は、誰しもが否定できません。

また、他人よりお金が信用で  
きる、という生き方は、持続可  
能な関係性に繋がらないことも  
否定できません。それは、金の  
切れ目が縁の切れ目であること  
も真実であるからです。

お金では得られない、人間同士  
による関係性は、面倒なことも多  
いですが、それ以上に人間を育み、  
癒し、活性化する上で有益性が大  
きく勝ることも周知の事でしょう。  
なぜなら、人間は関係性の中  
で生まれ、育ち、関係性の中で死  
を迎えることができる唯一の生き  
物だからです。

関係性は、血筋や遺伝子で十分  
「築ける」と考える人もいるかも  
しれません。しかし、人間が本當  
に成長する「気づき」をもたらす  
他者は、遺伝子に限らない場合の  
方が多いのです。環境により遺伝  
子の構造自体変化しませんが、質  
は変化することが、遺伝子のメチ  
ル化によって証明されています。

本来お寺が、「ソーシャルキャピ  
タル」を「築き」、自己に「気づく」  
という人間の成長の為の有益な構  
造機関であることは既に存じの  
通りです。お寺は、これから他  
者との関係性を「築き」、自己に「気  
づく」場を提供し続けます。

「私は神さまも信じていますが、  
それではいけないのですか」⑭最終回  
「親鸞の神祇不拝から学ぶ戦争」

## 7. 機法一体

信楽峻磨は親鸞の信心の内実を、  
絶対的自己矛盾の「目覚め」として  
以下のように説明しています。

信心体験、「めざめ」体験の内実と  
は、暗黒の世界と光明の世界、地  
獄の生命と如来の生命の、絶対的  
に矛盾対立する二種の事態が、ま

ったく相即して自覚されてくる  
こととなります。私の現実存在と  
は、その心の深淵に、地獄の生命  
と如来の生命とを、まったく絶対

矛盾的自己同一的に宿している  
ことであつて、親鸞さまにおける  
眞実信心が、まさしく「めざめ」

体験であるということは、そうゆ  
う私の心の奥底にひそむところ

の、地獄の生命と如来の生命につ  
いて、同時に即一して「めざめ」  
ていくことであり、そのように自  
覚されてくることをいうのです。

『真宗の本義』

アミダの還相の根源である法蔵  
菩薩は、凡夫と矛盾し、相反する性  
質（救う側と救われる側…両価性）  
を持つものに一体性があつて信心  
の内実は成立しています。

しかし、還相回向に見られるよう  
に投影の引き戻しを経ている為に、  
あくまでも優れた超人を投影する  
方向性（往相）とは異なります。こ  
の往相の方向性は、キリスト教の熱  
心な信者が神との距離をおく関係  
性に示されます。

この場合、自分より遠く強い対象  
が崇める対象となり、どんどん神聖  
化が進みます。その分肥大化された  
神像イメージとなり、主体性の無い  
人間を作り、自らも神聖化し（同一  
化）、正義の為に神の力を借りて、  
つまりトラの威を借りて、平気で人  
を殺します。

主体性の無い人間の残虐性は、関  
東大震災での朝鮮人の虐殺行為や、  
ユダヤ人の大量虐殺に見られる人  
間における残虐性の本質を示して  
います。

ミルグラム実験に見られる人  
間の残虐性は、別名アイヒマン実  
験と言われ、ヒットラーの最も忠  
実な腹心アイヒマンの名が付け  
られるほどです。この実験の内容  
について次に説明したいと思い  
ます。

## 8. ミルグラム実験とスタンフォード監獄実験

アメリカのイエール大学にお  
いて、1963年に社会心理学者ス  
タンリーミルグラムは、閉鎖的状  
況におかれた人間が権威者のも  
と、究極の命令に従うまでの心理  
状況を実験しました。

ヒットラー率いる、ナチスドイ  
ツにおいて、数百人のユダヤ人を  
収容所に送る責任者であった、ア  
ドルフ・アイヒマンの裁判は、ど  
んな残虐な人格を持つ人間かと  
いう想像から、当時は大変注目さ  
れたのです。しかし、実際に裁判  
に現れたアイヒマンは、職務に忠  
実に励む小心者の小男でした。

犯罪人の人格や、一般的な人格  
の持ち主が残虐な人格に変化す  
る条件とは何なのか？という疑  
問からミルグラムの実験は行わ  
れました。

実験の内容は、まず命令を下す  
権威者（E）と教師役（T）が同  
じ部屋におり、教師役は別室に控  
える生徒役（L）に対し問題を与  
え、間違う度に権威者から指示さ  
れた通りに「体験」と称して45  
ボルトの電流を生徒役に流すの  
です。実際は生徒役と権威者は演  
技をしているサクラで、教師役の  
みが実験の対象者でした。

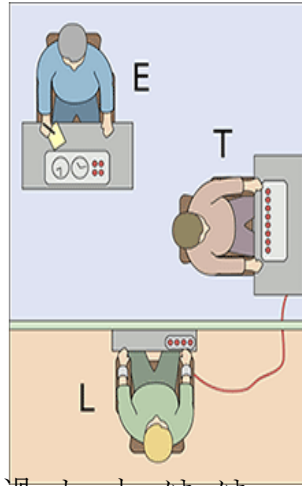
権威者（E）と結託している生  
徒役（L）は、電流が流される度  
に苦しむよう指示されています。

徒が間違えるたびに電流の量

は増やされ（実際は流していな  
い）、苦痛を訴える声がインター  
フォン越しに聞こえてくるの  
です。しかし、教師役（T）は、  
その苦しみの叫び声をよそに最  
大450ボルトのスイッチを入

れても権威者の命令通りに躊躇なく電流を上げていったのです。

そして三度続けて電流は流されました。この電気量は人間に対する致死量以上の数値になります。



役職が人間をつくるという考えはまさにその通りで、人間の役割は次第に内在化され、集団と一体となって独善性が生まれます。そして、集団と自己が一致していく過程において、その残虐的な体質を生んで往くのです。

細江達郎は服従の心理過程について、次のように論じています。

また、このミルグラム実験のバリエーションでは、1971年スタンフォード大学で行われた監獄実験があります。ここでは実験用の刑務所を創り、新聞広告で二十一人の被験者を集め、十一人を看守役、十人を囚人役に分け、それぞれの立場を演じさせたのです。

結果は、囚人は受刑者らしく

看守は看守らしく変化し、実際の刑務所よりも非人道的に受刑者を扱いました。暴力はエスカレートし、囚人役は恐怖を覚え、屈辱感を与え、演技がリアリティを増し、六日間で実験は中止されました。

従う規範を学習している。そうした先行条件をもった個人は集団に加入することにより、その集団の権威者の確認や集団規範の習得を行う。そうした直接的

先行条件を前提にして、権威者の命令を徐々に実行し、権威者の代理人として義務、規律、忠誠といった徳目を重視した集団の理念の忠実な実践者となる。

### 人間の主体性と知恵の無さ(無明)

は、これほど簡単に残虐性を生むのです。この残虐性がホロコーストやルワンダ虐殺などの悲劇を生んだことは否めません。また、虐待は精神的にも肉体的にもエスカレートしていくことも理解できます。そして、**権威者が絶対化(＝神聖化)**することで地獄の世界が展開されるのです。

無明こそ「絶対化された人神」に全てを委ねる自己のあり方であり、ここに、人間の**純粹性(聖なるものへの衝動)**を利用する権威者の意図があり、親鸞聖人が最も恐れた世界観を見ることが出来るのです。

後鳥羽上皇が下した宗教的権威による行為は、この人間の根本的な**無明**さが犯す最大レベルの「罪惡」であることが理解できます。

仏様と神様のお参りの違いに関して、仏教は個人的主体的に生きる為の教えであり、神道に關しては、全体に習うべき社会化の現象にすぎないことは、詳しく述べる必要がありません。

この特質には、**権威者の代理人が、集団理念の忠実な実践者である先行条件を有していることも明らかであります。権威者の代理人として私たちは何時でも、忠実に人を殺せるということとです。**人間を残酷にさせるか否かは、その人の条件次第ですが、どんなにまじめで誠実な人でも、残酷性を発願し殺人を犯すことは、次の通りです。

さるべき業縁をもようせば、  
いかなるふるまいもすべし  
『歎異抄』

愛憎違順することは 高峰

がくさん

岳山にことならず(愛執する  
心は増長し、憎怨はますます  
高まっていく「高僧和讃」)

と親鸞上人が説いた悪人像は、私達が受け容れなければいけない私自身に振り向けられた真実の言葉なのです。

二つの実証実験の根本には、人間の持つ純粹な信仰が罪悪では無く、人間の持つ罪悪性、罪障性を浮き彫りにしたものであり、この本質が人間を戦争に駆り立てる傾向、煩惱を示していることが分かります。

親鸞のみ教えは、我々に潜む闇は勿論の事、その闇を引き起こす社会的「構造」にも問題があることは、次の「真俗二諦」が明らかにしています。

## 9. 真俗二諦と神祇不拝

真俗二諦とは、本来言葉にできない真理を「真諦」とし、その「真諦」を言葉で表現したものを「俗諦」とします。また、「諦」とは明らかにするという意味になります。

しかし、蓮如上人以降の本願寺教団は、真俗二諦の「真諦」を仏法、「俗諦」を王法として理解し、権威者を王法として習い、戦争に加担してきた歴史があります。

仏法と王法は、「王法はひたいにあて、仏法は内心に蓄えよ」(蓮如)や、「車の両輪のごとし、鳥の双翼のごとし」(存覚)として、権力者に対し、門徒にその忠実さを求めたのであります。

一向一揆以来、門徒の集团的暴走を抑える為に、本願寺教団は、「真俗二諦」の教学を捻じ曲げたことは、否定できません。親鸞聖人が、「真俗二諦」について言及した文章はありません。にもかかわらず、これを中心とした蓮如以降の本願寺教団は、大戦に至るまで戦争協力をしたのです。

時の権威者に従った正しい戦争は、聖なる戦争であり、人神である天皇に身を捧げることで浄土に往生できるとして仏法と王法を結び付け教化したのです。

この教団及び日本全体が築いた負の遺産を私たちは、反面教師にしなければなりません。一方、自己の闇を知る人は、民衆操作の為に、権威者が都合よく創作した神様(人神)に迎合癒着することなく、主体的安心を得られます。

杉本顕俊は、

「この世のご利益は神さまに」「後生のことは阿弥陀さまに」そんな信心が流行っている。でも現世で救われていない者が死後に助かるはずがない。と説いています。

もし、自分の思い通りになる世界を神様が実現するなら、(「ご利益」自分と神とが同一化され、自分が絶対となり、自分以外は差別し、排除され、正義の名を借りた地獄が続くのです。

そんな自分だけが利益を生むことを委ねる為の神や、それを実現する正義なる世界は、絶対に作ってはならないのです。

日本人は、他人と同じであれば一時的に安心する一方で、全体性に飲み込まれやすい体質をもちます。これは独裁国家に従属する脆弱性、つまり、戦争の先行条件を持っているということを意味します。神道によって培われたその日本人の政教一致の体質を利用し、人心さえも支配下に置こうとする権威者による社会的「構造」はまだ続いています。

日本が先進国七か国で一番自殺者が多い理由は、その社会的「構造」が生み出す安心が一時的にしか過ぎず、利用される側の私たちが、すぐ見捨てられる側に転ずる先行条件を持っているからではないでしょうか。

本当の自分を知るとその背景にある社会的「構造」が相対的に見えてきます。

闇を抱えた本当の自分を知る、自分に目覚める生き方には、神に頼る、すがるという主体性のない生き方は、必要ありません。この真実を親鸞は「神祇不拝」として、私たちに教えてくれるのです。(終わり)